



Title	日本現代詩の比較文学研究 : 田村隆一と20世紀の世界文学の共振 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	陳, 璇
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14570号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/81441">http://hdl.handle.net/2115/81441</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Chen_Xuan_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 陳 璇

主査 教授 中 村 三 春  
審査委員 副査 教授 水 溜 真由美  
副査 教授 村 田 勝 幸

## 学位論文題名

日本現代詩の比較文学研究——田村隆一と 20 世紀の世界文学の共振——

### ・当該研究領域における本論文の研究成果

詩人田村隆一の作品研究は、戦後の『荒地』派の詩人としての活動を中心として、主に戦中・戦後体験の観点から展開されてきた。それに対して本論文は、アメリカ、アイオワにおける IWP（インターナショナル・ライティング・プログラム）という国際的な文学の共同活動に田村が参加した体験を軸として、国際派詩人としての田村、およびその所産として詩作品という論点から、改めて分析し再評価を加えた斬新な研究である。

そのために序論においては、従来の日本現代詩の比較文学的研究に関する研究史を通観し、そこに欠けている要素として、戦後以降の国際化時代における日本詩人の海外における活動の重要性に着目し、またそのような国際的な共同活動において成立した所産を認識する手法として、従来のような「影響」ではなく、「共振関係」という見方を提起し、本論の前提としている。本論の第一章では IWP と田村との関わりを、IWP を主導したアイオワの詩人ポール・エングルとの交流や、そこにおける田村の活動の詳細、さらに IWP における田村の位置づけなどを丹念に検証して分析している。第二章では、多分に思弁的・観念的要素の強かった初期の詩風から、後期以降に平易な語り掛け調をも含む書き方へと大きく変容を遂げた田村の詩が、特に W.H.オーデンのライト・ヴァースの理念の導入によることを解明し、その理念が田村の詩の言葉遣いや発想に対してどのように響いたのかを、オーデンの原著をも多数参照しながら明らかにしている。そして第三章では、再び IWP とアイオワにおける田村の活動や交流において培われた要素を、都会対田舎のイメージの対象を核として問題にし、そこに将来すなわち現代の日本のあり方をも望見する発想を指摘している。

全体として本論文は、田村の詩の様式と文学的営為の問題を、詩のテキストそれ自体のみならず、比較文学的・文化交流史的な手法を用いて再検討したものである。特に IWP という、アメリカにおける作家・詩人たちのワークショップへの参加が、田村の視野と言語表現をいかに広げ、高めたのかを実証的に追究した点において、これまでの田村研究や、日本現代詩の研究には稀薄であった国際交流とそれに基づく詩創作を解明したことにより、研究史に新たな一頁を付け加えたものとして評価できる。これらのことが、多数に上る末邦訳の英語文献の筆者自身による翻訳を盛り込み、事実関係の精査を基礎に据えた論述によって詳細に追究されていることから、本論文は田村隆一および日本現代詩研究の領域において、高い研究成果を上げたものと認められる。

### ・学位授与に関する委員会の所見

本論文は田村の IWP への参加を主とした滞米体験を克明に追跡し、詩人・作家・研究者との交流によって田村が日本の代表的詩人として認められ、さらには世界的詩人の一人として認められるよ

うになった経緯を逐一明らかにし、そのような国際的な文化交流の観点から田村の詩の読み直しを企てたものとして評価できる。これまでの詩のテキスト自体に基づいた読み方に加えて、このような新たな視点からの理解が浸透することにより、田村の文学的業績の総体が見直され、改めて理解と評価が進められるために、本論文は大きな寄与となるものと認められる。

ただし、従来になかった新機軸の論点であり、日本語と英語にまたがり、さらに詩作品をも含む幅広い対象にわたる研究だけに、幾つかの問題点も審査において指摘された。すなわち、(1) IWPでの活動や、滞米体験を中心とする田村の実体験や思想の反映や投影を大枠とし、それによってテキスト解釈が行われており、詩そのものの問題としてとらえる観点が稀薄である点、(2) 事実関係の理解に重点を置く反面、冷戦構造下における IWP の問題性や、オーデンあるいは田村の思想や認識、さらに詩作品に対する批評的・批判的な論点に乏しく、対象との間の学問的距離を必ずしも適切に確保できていない場合のある点、(3) 特に、翻訳によって流通し受容されることで豊かになるとされる最近の「世界文学」の議論や翻訳論の立場など、より現代的な比較文学の理論に対する顧慮の欠けている点などである。しかし、これらの諸点はいずれも本論文の斬新な研究姿勢と表裏をなす問題であり、本論文全体の達成度を損なうものではない。それらは申請者が今後も引き続き田村および日本現代詩に関する比較文学的な研究を持続し、さらに深めていくことにより、解決および発展の期待できる課題であると思われる。

本審査委員会は、以上のような審査結果に基づき、全員一致により、本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものと判断した。